



第6回「忘れられない 看護エピソード」集

2016年「看護の日・看護週間」

スマーリーの数だけ、愛がある。

愛かな歌姫

「教える」よりも「聞く」

未薦(みらい)

想い聞かせる



公益社団法人 日本看護協会

もくじ

最優秀賞

3 専属ナース物語 看護職部門

5 静かな勇気 一般部門

内館牧子賞

7 「教える」よりも「聴く」 看護職部門

8 未薦(みらい) 一般部門

優秀賞

9 人生を変えたことば 看護職部門

10 お湯加減は

いかがですか? 看護職部門

11 神様の声 看護職部門

12 川柳セラピー 一般部門

13 やさしい声 一般部門

14 告知日に開いた

“幸せへの扉” 一般部門

入選

15 思い、届くことを願って 看護職部門

16 患者の手から感じる

思いに触れて 看護職部門

17 笑顔を引き出す看護 看護職部門

18 起死回生の誕生日 看護職部門

19 かえって来てよかつた 看護職部門

20 魔法 一般部門

21 看護師さんの昼寝 一般部門

22 ホタルの光に癒されて 一般部門

23 命を与えてくれたチュー 一般部門

24 願いごと 一般部門

はじめに



5月12日は「看護の日」です。

近代看護を築いたナイチンゲールの誕生日にちなみ1990年に制定されました。それ以来、「看護の心をみんなの心に」をメインテーマに厚生労働省と日本看護協会の主催で、毎年さまざまな事業を全国各地で行っています。

2016年度は、第6回「忘れられない看護エピソード」を看護職と一般の皆さんから募集。3,305通の応募の中から、特別審査員の内館牧子さん(脚本家)、ゲスト審査員の剛力彩芽さん(「看護の日」PR大使)による、よりすがりのエピソードを20作品、ここに収録しました。今回は入賞作品のひとつである〈静かな勇気〉を映像化。5月8日の表彰式では初上映も行いました。

けがや病気で入院したり、ご家族に付き添ったり。患者さんやご家族にとっても、看護にあたる看護師にとっても、心に残り、ずっと人生を支えてくれるような看護体験があります。

その後の人生を生きていく糧となるような、忘れられない言葉をもらうこともあります。看護は、人生を変えることだってあるのです。

看護にまつわる感動のエピソードが、生きる素晴らしさを思い、明日を生きていく力を生み出すきっかけになれば幸いです。

公益社団法人 日本看護協会



専属ナース物語

〈長崎県〉 庄崎 美恵 37歳

「お前は最低の看護師だ！」

これは、2013年の寒い冬の夜、ある患者さんから言われた言葉です。

「ある患者さん」というのは、私の父です。

父は肝硬変を患い、私が勤務する病院に入院し、治療を受けました。その闘病生活はとても厳しいものでした。私は介護休暇を申請し、そばに付き添う生活を送りました。

看護の仕事に就いて15年。初めての経験でした。

私は、看護師であるプライドと家族からの期待を裏切らないように、毎日自分の力の限り、必死で付き添いました。しかし、父は夜間にせん妄状態になることがあります。そのため、「なんで私を困らせるの？」

とつぶやきながら、布団に潜り込んで号泣しました。

「お前は最低の看護師だ！」という言葉も、せん妄状態の父が発した言葉でした。私は、父から言われたというショックと、看護師としてのプライドが一気に崩され、父の部屋を飛び出し、待合所で号泣しました。そして、いつの間にか寝てしましました。

その夜に不思議な夢を見ました。

幼い私と若い父。私が楽しそうにワープロを教えてもらっている風景。次は、苦手だった数学を教えてもらっている風景。次から次に場面が展開し、まるで物語のような夢を見ました。気付くと窓から日が差していました。その朝は、とても

不思議な気持ちになり、逃げ出しあはずの父の病室に自然と駆け寄りました。

父の寝顔を見て「もしかして、今度も私に何かを教えるかもしない」という思いが私の心の中に舞い降り、その瞬間に柔らかい涙が頬を流れました。

その日から、夢の続きをの「専属ナース物語」が始まりました。

介護休暇が終わり、仕事に復帰した私は、日中は看護業務を、夜間は私服に着替えて父の付き添いをしました。父は、白衣を着た私には厳しく、あいさつや立ち姿、環境整備などを細かく評価し「お前は心遣いが足りないことが多すぎる」「お前の看護はアイデアと発明が足りない」といった感じで、毎日叱つてくれました。でも、白衣を脱いで娘に戻ると「お前の仕事は大変だ。体を大事にしろよ」と温かい声を掛けてくれました。

いつの間にか、家族の病気という大きな出来事も、私に与えられた

素晴らしい時間なんだと思えるようになりました。

「お前もいい看護師になってきたな」と言つてくれた1カ月後、父は家族に囲まれて旅立ちました。

時が経ち、父の友人から「お父さんは『俺の専属ナースは最高の看護師だ』って、美恵ちゃんのことをいつも自慢していたよ」という話を聞きました。そのとき、涙があふれ、目の前の父の写真がゆがんで見える中、「お前に合格点をやる。専属ナースはたくさんの人を助けなさい」という声が聞こえた気がしました。

私は、今もその場所で働いています。時に叱り、時に褒めてくれた父の言葉を胸に、私のナース物語は、これからも続きます。



静かな勇気

〈滋賀県〉 高野 裕子 49歳

12年前の冬、ある病院で私の夫は最期の時を迎えるようとしていました。まだ35歳、闘病の3年間、手術や抗がん剤治療を繰り返しながら、当時はまだ珍しかった病院内での「患者と家族の会」も立ち上げ、精一杯、病気と闘つきました。そして、よく笑う幼い2人の子どもたちと穏やかで幸せな日々を送っていました。

しかし、病は夫の体の自由を奪い、感覚を奪い、次第に意識をも奪つていきました。痩せた体は驚くほど脚がむくみ、私一人では抱えきれない状態になりました。そんなある日、私は夫の着替えを手伝ってくれている看護師のUさんのお腹が大きくなっていることに気が付きました。もっと早く気付いてお願いしました。もっと早く気付いて

も良かつたはずですが、日ごろからお腹をかばう様子も見せず、いつもキビキビと動き回る姿はとても妊娠さんは思えなかったのです。
遠慮がちにUさんに聞くと、やはり赤ちゃんがいるとのこと。すぐほかの看護師さんに代わってもらうようお願いしました。が、Uさんは聞き入れてくれません。夫の体は相当な重さです。夫の体を抱えたとき、ベッドの縁がUさんのお腹に当たりぐにゅつと食い込むのが見えて、思わず声が震えました。
「お願いだから誰かに代わってもらいましょう。彼はとても子どもを大切にする人です。もし彼が話せたら、きっと『やめて』って言うと思います。だからもうやめて、お願いだから……」

その時、必死で懇願する私にUさんは言いました。

「実は、私はあしたから産休に入ります。きょうが高野さんのお世話をできる……たぶん最後の日にになります。きょうが高野さんと奥さんがん

「最後の日」と言うUさんの顔がゆがみました。全ての意味を含んでいるのが分かりました。「私たちには今まで高野さんと奥さんがんばりをずっと見せてもらっていました。諦めない明るいお二人を見ながら、今のどうしようもない現実がとてもつらいです」。その目は真つ赤で、今にもこぼれそうなほど涙が浮かんでいました。

「高野さんの姿を見ながら、この子が生まれる意味を私はとても感じさせてもらっています。だから今日は私はやらせてください。絶対、無理はしませんから……」
その後、Uさんと私は一緒に泣きながら、笑いながら、そして夫とお腹の中の赤ちゃんに話し掛けながら、時間をかけて夫の着替えを終えました。

逝くことと生まれること……。
そして、それらに添つて見守ることを私たちはそれぞれの立場で共有していましたのでしょう。それは、途方もなく寂しくて、温かく優しい時間でした。
現在、私は「入院患者と家族のためのサポートハウス」を作ろうと奮闘しています。小さくてもいいのです。あのときもらった優しい時間と静かな勇気を同じ立場の誰かに届けたいと思っています。

あのときの赤ちゃんは、きっともう12歳。あの日からずつと会いたいと思っています。忘れたことはありません。Uさん、もし会えたら抱きしめてもいいですか?
「あのときは、協力してくれてありがとうね。あなたと、あなたのお母さんがくれた勇気を、今でもうれしく覚えているのよ」

＊＊＊＊＊

〈静かな勇気〉は、映像作品としてもお楽しみいただけます。
詳しくは25ページをご覧ください。



「教える」よりも「聴く」

〈富山県〉中村 凡子 44歳

なかむら
なみこ

「もうおっぱいをやめたいんです」
Mさんは、思い詰めた表情で
私に訴えた。「母乳で育てたい」と、
出産直後から人一倍努力してきた
お母さんである。母乳の量は少し
ずつ増え、赤ちゃんも順調に育つて
いたが、おっぱいの痛みが良くな
らないのが悩みで、母乳外来に通つて
おり、この日は私が担当であった。

自分の母乳で赤ちゃんを育てる——。ごく自然で、そして掛け
替えのない体験だ。しかし、知識や
支援を得る機会がないために、
途中で諦めてしまうお母さんが
たくさんいる。かつての私も
その一人だった。だから、助産師にな
ってからは、一人でもそんな人が
が少なくなるようにという想い
でやってきた。

けれど、「今はとにかくMさんの
気持ちを聴かなければならない」
と思った。せきを切ったように
彼女は話した。母乳の良さがよく
分かっているからこそ、ずっと
悩んでいたこと。でも、痛みが強
くて、体中がつらくて、今は授乳に
恐怖を感じること。

母乳育児支援を行う専門職と
して、言いたいことはたくさん
あつた。でも、「育児を楽しいと思
えなくて」というMさんの言葉
に、私はそれを全部飲み込んだ。
「今まで精一杯がんばりましたね」
聴き終えた私がそう言うと、
Mさんの目から涙があふれた。
それから、母乳を中断するため
にアドバイスをして、Mさんを見
送った後、無力感に包まれた。M

さんの思いをかなえるために、
もっと何かできたのではないか。
取り返しのつかないことをした
のではないか……。

ところが後日、私の顔を見て駆け
寄ってきた彼女は言った。
「あの日、話を聞いてもらつて、
気持ちがすごく軽くなつて、おつ
ぱいの痛みが楽になつたんです。
やめる理由がなくなりました。本
当にありがとうございました」
教えることより「聴くこと」の力
を実感した瞬間だった。その後約
1年半、母乳を続けたと後に聞いた。
「母は強し」とよく言うけれど、
ちょっとした支えがあれば、もつ
と強く、優しくなるのだ。そん
な手助けができるこの仕事、当分
辞められそうもない。



未薺（みらい）

〈大阪府〉岡森 陽子 31歳

ダメメイドの貼り絵やさん」と
して生きている。

生きていくために「夢をみ
る」大切なことを教わった。
彼女は、私にとつて「恩師」で
あり「お母さん」であり、そして
何より「看護師」だったのだ。

※題名の「未薺」は、今はまだ薺だけれど、たくさんの可能性を秘めていると
いう意味の造語です。

いつものように、待合室で絵
を描いていた。まだ、夢はなかっ
た。

17歳で甲状腺疾患を患つた私は、
この日も検査で病院にいた。
時間だけはあるので、一人で絵
を描いていた。すると、なじみの
看護師Sさんが声を掛けてくれ
た。

「上手だね。私にも描いて。クマ
さんとウサギさん。お願いね」

柔らかい口調の中に芯の強さ

を感じた。彼女はどういうつも
りで、こんな言葉を発したの
だろう。数日後、完成させた絵を
彼女に渡すと、お礼と一緒に勘
違いにも取れる言葉が返つて
きた。

「売ればいいのに。画家になつて」

「売ればいいのに。画家になつて
たつた一言の「コトバ」のパ
ワーを思い知った。「看護」とは、
きっとその人の将来のことも
責任を持つ「看る」とことなのだ。

「見守られている安心感」
とは、とてもなく大きな力に
変換される。その2年後には、
2回目の個展を開催することができた。そして現在、私は「オー



人生を変えたことば

（東京都）小林 加代子 37歳

母は、50歳の時、仕事場から救急車で運ばれた。脳梗塞だった。

後遺症で右足が全く動かず、軽度の言語障害も残った。ずっと働き続けてきた母にとって、信じられない出来事だったろう。

医師は「寝たきりになる覚悟をしてください」と告げた。

両親は離婚しており、高校卒業後、私は一人で生きていくために看護師の資格を取った。そして、働いて3年目のことだった。内緒にしていたが、母の肺に影が見つかった。肺がんだった。正直に言うと、当時、私は母が嫌いだった。それでも、私は毎日、母の所に通つた。さまざまな思いが交錯し、葛藤する中で、私は何も告げず、見舞い続けた。がんばりやの母は

何も知らず、リハビリに励んだ。

ベッドの上でリハビリが終わり、車いすに移行になった時だ。母が、笑顔で私に言つた。

「ねえ、車いすの使い方を教えて」

言われた瞬間、私は即座に答えていた。

「一生乗るつもりなら、教えてあげるよ」

看護師として言つたのか、家族として言つたのか、覚えていない。回復の過程で一時的に車いすを使うことはある。ただ、分かつていたのは、この段階で甘やかせば、回復が遅れてしまうということ。使う意味で甘やかせば、人生を変えることができたこと、「あなたおかげ」と言つて、「あなたおかげ」とふに落ちたと。自分で「あなたおかげ」と言つてもらえたことが看護師としての誇りだ。ありがとう。こんな幸せなことはない。

お湯加減はいかがですか？

（東京都）長田 美保 54歳

約束をしました。

「お湯加減はいかがですか？」

そう尋ねる私に、Tさんは湯船の中で「気持ちいいなあ」と目を細めながら、ふるさとや家族のこととうれしそうに話してくれました。入浴後はシューズをおいしく、うれしそうに話してくれました。季節は冬から春になり、週一回だった入浴も2回に増やしました。しかしその後、体調は徐々に悪くなり、ついに自宅での入浴ができなくなりました。

その時Tさんは「もうデートができるなくなっちゃったよ」と力なく笑つたのです。私は初めてTさんとつぶやきました。それならばと、次回の訪問から入浴のお手伝いをする

私が訪問看護師として初めて自宅に伺った日、Tさんはソファに座り「食欲がなくて体がだるいんだよ」と弱々しく話しました。その傍らで高齢の奥さまが心配そうに見つめています。Tさんは「もうこうがんと診断されて、尿を外へ出すためのチューブを挿入していました。治療していた病院では「もうこれ以上の治療法はない」と告げられていたのです。

穏やかな表情でしたが、その大きな瞳はしっかりと私を見据え「あなたは何をしてくれるの？」と問い合わせているようでした。

話をするうちにTさんが「家のお風呂に入りたいなあ」とつぶやきました。それならばと、次回の訪問から入浴のお手伝いをする

時間だったのかを知りました。

それから1ヶ月。寝たきりと言

われた状態から、母はつえで歩け

るまでになった。医師は、母のレントゲン写真を見て「奇跡だ。これは本当にあなたですか」と言つた。

その後肺がんの手術も無事に終え、今も再発はない。右まひは少し残るもの、日常生活に支障はない。今でも母は言う。私のあの一言があつたから、自分の可能性を信じることができたと。あの一言で「どうか、歩けるんだ。諦めちゃいけないんだ」と、ふに落ちたと。

自分の一言で、大事な家族の人生を変えることができたことと、「あなたおかげ」と言つてもらえたことが看護師としての誇りだ。ありがとう。こんな幸せなことはない。

愛する家族との思い出が詰まつた家のお風呂でおしゃべりをする時間は、身も心もリラックスして、病気のことを忘れられるひとときだったのかもしれません。

夏が終わるころ、Tさんは私の訪問中にご家族に見守られながら永眠されました。奥さまの「あなたが訪問する日をいつも楽しみにしていたのよ」という言葉

ができませんでした。「人生の最初の時間を一緒に過ごさせていたときがありがとうございました」。そう心の中でつぶやきながらTさんの体を拭いていると、どちらともなく「気持ちいいなあ」と優しいTさんの声が聞こえてくるようでした。

神様の声



〈大阪府〉大井 真理子 47歳

「こんなには、入院中はお世話になりました」

数カ月前にリハビリ病院に転院したI君があいさつに来いると聞いて、勤務の合間に少し時間をもらい、救急部の受付に向かって。相変わらずきれいな顔をした少年である。照れくさそうにあいさつする彼を見て、少し障害は残つたけれど歩けるようになつたんだ、と喜んだ。

彼は、高校1年生の時に、自転車の単独事故で搬送され、重度の脳挫傷で入院。しばらくの間は低体温療法を行い、その後、少しだけベッド上でのリハビリを行つて、話せるようになるまでの回復を見届ける前に転院した私の受け持ち患者さん

だつた。彼をさすりながら「おはよう。今日も一日よろしくね」などと声を掛け、閉じたまぶたから伸びる長いまつげを眺めている。

まだ若いお母さんは、冷たい彼の体に触ると「ごめんね。寒いよね。がんばって……」と涙を流していたが、きっと元気になるだろうと信じて私はいつも明るいいろんなことを話し掛けた。状態が安定し、麻酔やクーリングも不要になり、開眼できるようになつた彼であったが、視線は合わず、話し掛けても反応はなかつた。「聞こえてるんでしようか……」と、心配そうなお母さんに「きっと聞こえていると思いますよ」と返答したものの、

私にも分からなかつた。

「元気になつたね。学校にも行つてるんだってね。勉強がんばりや」と、少しハッパを掛けた。すると「あ、この人や。神様の声の人や」と、うれしそうにさけんだ。

「いつも話し掛けてくれる人がいたけど声しか覚えてない。誰やつたんやろう。神様やつたんかなあ、つていつも言つてたんです」

「これからもお仕事がんばつてくださいね」

その声こそ、私にとつては神様の声であつた。

川柳セラピー



〈青森県〉類家 梢 41歳

柳が飾つてありました。

「がんなのに 楽しい食事は
ヤギのエサ b y てつぞう」

うちのお父さんだ……。聞けば

看護師長さんが、父があまりに

落ち込むので、川柳を勧めてくださつたそう。「俺は書きたくない

がんを患つていたのでした。今まで健康だった父ががんにかかるたといふことで、家族は大騒ぎ。山ほどの検査の後、放射線治療のため、入院したのでした。

最初は順調だった入院生活。しかし、持病の糖尿病のため、食事は薄味。量も制限され、どんどん落ち込んでいきました。

「帰りたい。たくさん食べたい」何度この言葉を聞いたか分からりません。ある日のお見舞いでのこと。ナースステーションに川

していただきたこともあります。

退院の日、ナースステーションへあいさつに行つたときのこと。

「がん治療 ついでに糖尿

治つたよ」

父の退院ということで、一緒に迎えに来た母は大笑い。しかし、ここは病院。ぱっと口を押されたのでした。10年間、糖尿病の薬を飲んできたのに、がんの治療に来て食事療法のおかげで血糖値が正常になつたのですから。退院して3年経つた今も、すっかり薄味食が身に付き、血糖値は正常です。

父は今も再発も見られず元気で過ごしています。心の支えを川柳という形で提案してくれた看護師長さんに今でも感謝です。

「再発が 怖くてタバコ やめました」

「酔えないの ここは病院仕方ない」

良しあしはともかく、眞面目に生きてきた父らしい川柳です。院内の広報誌に作品を掲載



やさしい声

〈東京都〉谷口 治子 49歳

たにぐち はるこ

3年前、5歳の息子が急性リンパ性白血病と診断されました。10ヵ月間の入院。状況が飲み込めないまま私も一緒に入院することになりました。

入院して初めての晩、息子は麻酔でぐつたりと寝ていました。

しかし、私は病名、治療の説明いろいろが頭の中を渦巻いて眠るどころではありませんでした。暗い部屋の中、付き添い用ベッドの上にぼうぜんと座っているとカーテン越しに「ママがいなくてさみしい……」と泣きそうな子どもの声がしました。

隣の男の子がナースコールを押したのです。「ママは用事で泊まれない」と言っていたのを思い出しました。すると看護師さん

がすぐにやって来て彼に言いました。

「どうしたの？ 眠れないのかな？」

「うん。ママがいないから……」「大丈夫だよ。あしたすぐ来てくれるからね」

「でも怖いの。寝られないようすると彼女はこう言いました。

「大丈夫だよ。眠れるまで手をつないでいるからね」

「ささやくような優しい声で

した。もちろん私に向かられたものではないですが、その優しい声を聞いているだけで私もほっとしました。そしてようやく涙が出てきました。病名宣告以降、ショックで涙も出なかつたのです。

彼は安心して眠りについたのでしょうか。彼女は私のところに来て「ごめんなさい。起こしました。起こしちゃったどころか、混乱していた私まで安心してやいました」とお礼を言いたい

ていました。起こしちゃったどころか、混乱していた私まで安心してやいました」とお礼を言いたい

ていました。起こしちゃったどころか、混乱していた私まで安心してやいました」とお礼を言いたい

ていました。起こしちゃったどころか、混乱していた私まで安心してやいました」とお礼を言いたい

ていました。起こしちゃったどころか、混乱していた私まで安心してやいました」とお礼を言いたい

していました。起こしちゃったどころか、混乱していた私まで安心してやいました」とお礼を言いたい

していました。起こしちゃったどころか、混乱していた私まで安心してやいました」とお礼を言いたい

していました。起こしちゃったどころか、混乱していた私まで安心してやいました」とお礼を言いたい

3年前、5歳の息子が急性リンパ性白血病と診断されました。10ヵ月間の入院。状況が飲み込めないまま私も一緒に入院することになりました。

入院して初めての晩、息子は麻酔でぐつたりと寝ていました。

しかし、私は病名、治療の説明いろいろが頭の中を渦巻いて眠るどころではありませんでした。暗い部屋の中、付き添い用ベッドの上にぼうぜんと座っているとカーテン越しに「ママがいなくてさみしい……」と泣きそうな子どもの声がしました。

隣の男の子がナースコールを押したのです。「ママは用事で泊まれない」と言っていたのを思い出しました。すると看護師さん

告知日に開いた“幸せへの扉”

〈京都府〉小野田 真由美 40歳



優秀賞

第6回
忘れられない看護エピソード

[一般部門]

乳房の中に、小さな丸い塊を感じたのは、ハロウィーンの夜のことでした。検査から1週間後。

診察室で主治医から差し出された紙には、英単語が書かれ「これは悪性腫瘍という意味です」とストレートに伝えられました。不思議と涙が出ることはありませんでした。

「このことを知つたら、離れて暮らす両親の方が落ち込んで病気になつてしまふのでは」。そんなふうに考えながら部屋を出る

と、看護師さんは別室に案内してくれました。私と向き合つた

「この先何より大切にしなければならないことは何か分かる?」

「体ですか……」「それは、幸せになることよ」

告知を受けた直後です。幸せから一番遠い所に立たされたはずの私に、看護師さんは穏やかにほほ笑みながら続けます。

「仕事も、好きなお酒も大きく変えなくていいから、これからは、今まで以上にいっぱい笑つて幸せになつて悪いものをやつつけましようね」

それは、治療をしながら生きていく私に覚悟をくれた魔法の言葉でした。手術の前日、見た人に幸せが訪れる、という大きな

「ここまでがんばってきたなあと」思いながら手術台の上から天井を眺めていると、2人の看護師さんが私の右手と左手をそつと握つて

手術から2年。看護師さんたちがくれた“幸せ”と“ぬくもり”が、今も私の血管を巡り、胸の中の細胞を元気付けてくれています。

入選



思い、届くことを願つて

〈北海道〉祐川 尚子 55歳

「これ以上、治療の施しようはありませんって言われたんだ」とAさんは笑つて話された。私が「看護実習生が来るのでですが、よろしければ2日間、いろいろお話を聞かせていただけませんか」と伺うと「いいよ」と返つてきた。Aさんの妻はすでに亡くなり、2人のお子さんがいた。

「俺は若い時から好きなように生きてきた。全国を放浪して、まあ物書きのようなもんだな。でも家族にはかわいそうなことをしたと思っている。もう治療できなって言われた時、医者が呼んだんだな。何十年も会つていらない娘が来てくれて、本当にうれしかった」としみじみ話された。

持ち物は大きなポストンバッグ1つ。娘さんとお孫さんの写真がバッグからのぞいていた。数日が過ぎた。Aさんは最期の時を迎えていた。東京にいる娘さんに連絡すると、仕事中だつたらしく「この時間ですと間に合わないので、あした行きます」と淡々と話された。私はAさんとの会話を頭をめぐつた。娘さんが何十年ぶりに自分のために来てくれて本当にうれしかつたこと、お孫さんの写真を向こうで泣いていることが分かった。

私はお二人の思いを受け止められた。

胸が詰まりこみ上げる感情を堪えた。私はとつさに固定電話を自分のPHSに転送した。娘さんに「今、受話器をお父さんの耳に当てます、お話しすることはできないかも知れませんが、あなたの声は必ず聞こえているはずです」と伝えた。

Aさんの耳へ当てた受話器から「お父さん、お父さん、…」と何度も何度も声が漏れていた。私は「うなずいているように見えますよ」と伝えた。苦しそうに呼吸しながらも、穏やかな優しい表情に変わった。そう思えた瞬間だった。Aさんと娘さん、それぞれの思い、届くことを願つて……。

入選



患者の手から感じる思いに触れて

〈東京都〉品澤 一寿 39歳

私は手術をするAさんに手術時の説明を行つた。説明後、Aさんに「よろしくお願ひします」と握手をされた。私はこの時、Aさんの握り返してくる手の中から、不安の表れを感じ取つた。

私はAさんに「Aさんの手の力、強いですね」と話し、Aさんは「私、工場で働いていたから、手の力が強いのよ。でも目が覚めるか不安だわ。手を握り返せばいいのね」と私の目を見てほほ笑みながら話してくれた。

手術当日、麻酔が導入される前には、手術が終わったら、手を握り返してくださいね」と伝えると、Aさんはうなずき手を強く握り返してくれた。私はこの時、一人の人間としてAさんのことを思い、うれしくて涙を流した。

病棟のベッドに移るときに、Aさんは不安そうな表情を浮かべ、私は手を差し出しきた。私は、Aさんに「大丈夫ですよ」と声を掛け、手を握り返した。Aさんに「手術が終わったら手を握り返してくださいね」と伝えると、うなずき再度手を強く握り返してきてくれた。私は手を握り、今度は必ず起こすから大丈夫ですよと気持ちを込めて手を握つた。その時、一瞬だがAさんの表情が緩んだように思えた。

無事に手術が終了し、私がAさんに「無事終わりましたよ」と話すと、Aさんは力強く手を握り返し「うん、うん」と力強くうなづいてくれた。私はこの時、Aさんとの約束が果たせたと思い安堵した。

手術は順調に経過したが、麻酔を握ると、Aさんは力強く手を握り返してくれた。私はこの時、一人の手術は順調に経過したが、麻酔

手術は順調に経過したが、麻酔

手術は順調に経過したが、麻酔

手術は順調に経過したが、麻酔



笑顔を引き出す看護

〈神奈川県〉堀井 緑 30歳

私が小学生の時に、母は脳腫瘍で入院を繰り返すようになった。仕事と家事を両立しおしゃべりで明るい母も病気が進行するとあまり笑顔を見せなくなっていた。一日中病室でふさぎこんでいることが多くなり、面会の時には「ごめんね。お母さんこんなん」と家族に嘆くようになった。その言葉は自尊心を失っているようで、私は母に会うのがつらくなってしまい、どう接したらいいのか分からず、母との間に距離ができてしまっていた。

週末、面会に行つても元気がなかつた母を励まそうと病室で髪を切つてあげることにした。忙しそうな看護師さんはそのことは言わず、父と姉と兄、家族だけで母の髪を切ることにした。おしゃれが大好きな看護師さんは髪を切ると「短くなつたかな」とうれしそうに尋ねたが、

鏡を用意していなかった。「今、鏡はないから、後で洗面所に行こうか」。母にそう伝えしばらくすると、カーテンの隙間から鏡とくし出された。誰だろう。そう思いカーテンを開けると担当の看護師さんだった。「これ使ってください。Aさんとてもすきですよ。娘さんが髪を切ろううつ計画したのかな。Aさんを喜ばせたかたんですね。大成功だね」と言って、母と私の背中をそっと撫でてくれた。鏡とくしを手渡してくれた。くしで髪を整え鏡に映った姿を見て、母は「ありがとう。大成功だよ」と久しぶりに満面の笑顔を見せてくれた。久しぶりに見た家族が大好きなので、母の明るい笑顔だった。忙しいのに家族のやりとりを気に掛けてくれていた。私が母に掛けたかった言葉を代弁してくれたことで、母との距離を

縮めることができた。母と私たち家族への思いやりと気遣いの言葉に、感謝の気持ちで涙が止まらなかつた。

母のために何かしてあげられたのかと後悔する日もあるが、看護師さんが引き出してくれたあの日の母の笑顔と言葉を大切にしている。ふさぎこんでいた母の笑顔を引き出して、母と私を尊重してくれた言葉掛けが今でも忘れられない。私はあの日の看護師さんに憧れて看護師になり、ことしで10年目。看護師になつてから、いつも、いつも胸に決めていることがある。どんなに忙しくても、まつすぐ患者さんと家族を見つめよう。どんな時も患者さんと患者さんを支える家族の笑顔を引き出したい。私に教えてくれたあの日の看護を思い出しながら毎日働いている。

起死回生の誕生日

〈京都府〉金澤 佳織 45歳

暑さが厳しい夏だった。仕事盛りの50代の患者さんが自ら「終活だ」と言って入院してきた。珍しいがんにかかり、在宅で病気と闘っていたが、激しい痛みのため、毎日寄り添つて共に闘つてくれた妻についあたつてしまい、妻のほうが倒れる寸前だったこと、仕事人間で家庭のことは妻に任せきりで、これから旅行などをして妻への孝行をしたかったことを入院してきた日に寂しそうに話してくれた。

仕事上の付き合いも多かつたのだろう。入院してから面会は途絶えることはなかつた。患者さんの奥さんへの看護も自分の役割だと感じ、初めて会つた日から声を掛け、今までの苦労話などに耳を傾ける日が続いた。入院して2カ月

もすると、患者さん、奥さんの3人で昔の話や、どんな夫でどんな父親であったか、どんなに妻が尽くしてきたかなど、笑いを交えながら話せる関係になつていた。

7月19日、「妻が過労で倒れた」と、患者さんが何とも言えない悲しい表情で私に訴えた。「自分のこ

とでみんなに迷惑を掛けているのではないか」。脳への転移もあり半盲状態であつたが、よほどいつもぼにいてくれた奥さんがいないのが悲しかつたのだろう。必死でメールを打とうとしていた。その傍らで話を聞きながら、ふとメールに目をやると、メールアドレスの数字に目がいった。

「もしかして奥さんあした誕生



の数字に目がいつた。奥さんへの看護も自分の役割だと感じ、初めて会つた日から声を掛け、今までの苦労話などに耳を傾ける日が続いた。入院して2カ月

「7・20」

が病室を優しく包んでいた。



かえつて来てよかつた

〈岡山県〉和田 京子 40歳

看護学校を卒業し、3年間、精神科で看護師として働いた。その後は、看護とは全く違った仕事、牧師として働いていた。牧師の仕事を辞めた時、迷った。看護の仕事を再びしようか。しかし、13年間というブランクは大きい。

「大丈夫、先生は15年のブランクだったのよ！」という言葉に励まされ、私は思いきつて看護師として内科病棟に勤務するようになつた。

だが技術面、治療方法、薬剤など、分からぬことだらけだった。私は忙しさと不安の中で過ごしていた。仕事ははかどらず、

迷うばかりの私だつたが、ある時、モニターもついて、いつお亡くなりになつても不思議ではない患者さんの家族から声を掛けられた。

「おじいちゃん、スイカが大好きだつたのです。死ぬ前に一口でいいから食べさせてあげたい」

その患者さんは絶飲食で点滴指示をもらい、私は口腔ケアの時、ガーゼで口腔内を湿らせて汚れを取り除いていた要領で、スイカの汁をガーゼに含ませてそっと患者さんの口の中に入れそと患者さんの中に入れてみた。すると、目を閉じて過ごすことが多かつた患者さんがパチッと目を開けて言つた。

「うまい！……うまい……うまいなあ」

それから幾日か後、患者さんはお亡くなりになつた。家族は、わざわざ私を見つけて伝えてくれた。

「あの時、してもらったことが忘れられません。悔いが残らずやかつた。ありがとうございました」私は、涙があふれた。たとえ、寝起きであつても、終末期であつても、人として生かされていることへの援助を行うことができる看護は、人々に感動とう幸せを届けるのだと実感した。看護の仕事にかえつてきて良かったと思つた時だつた。



入選

魔法

〈北海道〉福士 勝久 83歳

私は、78歳で前立腺がんを告げられた。しかし、年齢が高く手術はできないという。がん治療の方法が確立しているとは聞いていないし、死が身近に迫つたと思った。放射線治療のために入院したが気持ちちは晴れなかつた。

私の隣のベッドに、小学3年生くらいの男の子が入院してきた。親から離れて入院したのだから何があるのだろう。私はその子が気になつて仕方がなかつた。看護師さんが何度も見に来て、お世話をしているが、四六時中付いているわけではない。私は様子を見てそれとなく声を掛けるようにした。

親御さんが男の子のところに来るとときは、いつも3・4歳くら

いの女の子が付いてきた。妹らしいその子が4つか5つ年上のお兄ちゃんを「けんた、けんた」と呼び捨てにする。親のまねだが、それも気になつていた。

お母さんに女の子の名前を聞くと「とうこです。東に子と書きます」と言う。

「東子ちゃん。私はね、あなたがすてきな人になる魔法を知っています。魔法は嫌ですか？」東

子ちゃんがけげんな顔でお母さんを見た。

「そりゃー、不安だよね。なんたつて魔法なんだから。東子ちゃんはお兄ちゃんのことを『けんた』って言つてるでしょう。

「小学校の先生だったようですよ。実はあの方、病氣で落ち込んでいたので、元気になつてほしくて隣のベッドをけんたくんにしたのです。おかげで元気になつてくれました」

そうだったのか、魔法は私がかけたのではなく私がかけられていたのだ。



看護師さんの昼夜

（福島県）五十嵐 一男 74歳

「ばつちやん、来たよ」

Kさんは祖母を巡回看護していく役場の保健師だった。

祖母は、脳梗塞により半身不随となり一人で起きることなどができなかつた。まだ入居できる施設が少なかつたころのこと、祖母は自宅で療養していた。祖母が発病した時、Kさんは近くの病院に看護師として勤務しており、祖母を初めて医師と一緒に往診された方で、役場の職員になつてからも引き続き担当してくれていた。

そのころ、わが家は生活に迫われ、祖母が療養している部屋の環境は決して良好ではなかつた。Kさんは、冒頭のあいさつもそこそこに祖母の周りを手早く

片付け、祖母の体を拭き、爪を切りながら笑顔で言う。

「ばつちやん、きょうはいい顔してる。何かいいことあつたの？」

「あつたとも。分かつか？」

「分かるよ。ちやーんと顔に書いてあるも」

祖母は、嫁いだ娘が持つてきてくれた菓子をゴソゴソと出す。Kさんはそれをうれしそうに食べながら「ばつちやん、ここが一番いい。私、眠くなつちやつた。寝てもいい？」

Kさんは、来るたびにほんの一時、祖母のひざを枕にして昼寝をされた。祖母は、唯一自由になる右手にうちわを握り、Kさんの顔を優しくあおぎながら寝てもいい？」

「くたびれてんだべ。あつちこつち回つて来てな。これ」と言う。日ごろ、一人で過ごすことの多い祖母に、まるで里帰りした娘のように心を通わせてくれたKさんは、看護を超えた精神的な支えでもあつた。Kさんは、多くの巡回先の中から、なぜか雑然とした祖母の部屋に来て昼寝をしてくれた。その姿を見つめながら、祖母はその時、病気を忘れて一人の母親にかえり最高の安らぎを感じていたのだろう。祖母は、若葉の香りの中、ほほ笑みながら家族とKさんの名を呼び「ありがとう」と言つて昇天した。祖母にとつてKさんは看護を通して、家族愛に劣らない生きる喜びを与えてくれた世界一の保健師さんだつた。

ホタルの光に癒されて

（埼玉県）加藤 なみゑ 66歳

2歳半の息子が、手術を終えてストレッチャーに乗せられて戻つて來た。頭には医療用の白いターバンがまだ巻かれていた。

小さな体には管が数本着けられている。点滴がポタリボタリと管から体に入つていく。お腹にも、尿が出るほうにも、そして背中にも管があり、その管と管が絡み合つて、寝返りをする息子の体に絡みつく。付き添う私は毎夜、長い手術から3日目のその日、病棟の主任さんが虫籠にたく

さんのホタルを入れて持つてきてくださつた。虫好きの息子は、初めてにつっこり笑い、とてもうれしそうに興味深くずつとながめていた。

その夜、消灯になつても部屋は、ホタルの光で十分だつた。ホタルの光は寝入つた息子を照らし、エールを送つてくれる。『ガンバレ、ガンバレ、きつと良くなるから』と。ホタルたちは交互に光を発し、

青白い息子の顔とそして数本の管を照らす。優しい光の中で息子はスースーと静かな寝息を立て始める。

朝になるとホタルはゆっくりと休み、そしてまた、夜に光りを發してくれた。

片付け、祖母の体を拭き、爪を切りながら笑顔で言う。

「ばつちやん、来たよ」

Kさんは、祖母を巡回看護していく役場の保健師だった。

「ばつちやん、きょうはいい顔

してる。何かいいことあつたの？」

「あつたとも。分かつか？」

「分かるよ。ちやーんと顔に書いてあるも」

祖母は、嫁いだ娘が持つてきてくれた菓子をゴソゴソと出す。

Kさんはそれをうれしそうに食べながら「ばつちやん、ここが一番いい。私、眠くなつちやつた。寝てもいい？」

「くたびれてんだべ。あつちこつち回つて来てな。これ」と言う。日ごろ、一人で過ごすことの多い祖母に、まるで里帰りした娘のように心を通わせてくれたKさんは、看護を超えた精神的な支えでもあつた。Kさんは、多くの巡回先の中から、なぜか雑然とした祖母の部屋に来て昼寝をしてくれた。その姿を見つめながら、祖母はその時、病気を忘れて一人の母親にかえり最高の安らぎを感じていたのだろう。祖母は、若葉の香りの中、ほほ笑みながら家族とKさんの名を呼び「ありがとう」と言つて昇天した。祖母にとつてKさんは看護を通して、家族愛に劣らない生きる喜びを与えてくれた世界一の保健師さんだつた。

命を与えてくれたチュー

〈神奈川県〉柏木 澄江 65歳

かしわぎ すみえ

65歳

昨年の4月30日に、父が93歳で天国に旅立ちました。

父は戦時中、陸軍将校として戦地に赴いた厳格で頑固な人でした。気丈な父も母に2年前に病氣で先立たれてから、表情も気力も目に見えて低下していきました。訪問看護師さんやヘルパーさんのお世話になりながら、一人でがんばってはいたのですが、だんだんとベッドにいる時間も長くなり、ついには肺炎を起こして入院ということになりました。

入院してからは、凜とした面影ではなく、点滴のチューブが何本もつながり、手にはミトンを装着された父の姿でした。私たちが声を掛けても反応が薄く、その姿にとてもショックを受けました。

夕刻になって、以前からお世話になっていた、訪問看護ステーションの看護師さんたちが訪ねて来てくれました。HCU(高度治療室)にもかかわらず、父の耳元で小さな声で「ハッピーバースデー」の歌を歌つてください、「誕生日プレゼントよ」と言いながら、皆さん代わる代わる、父のほっぺにチューをしてくださったのです。

その「チュー」が奇跡を起こしてくれました。父の消えかけていた

「命のともしび」をもう一度燃え上がらしてくれたのです。そのチューで、パッと生きる力を呼び覚ましたのでしょうか。次の日に遠方から見舞いにきた長男や次女や孫一人一人の名前もはっきりと分かることはありません。まさに「生きる力を引き出す看護」を目の当たりにした思いでした。

私は、この時ほど看護師さんの患者を思いやる力のすごさを感じたことはありません。まさに「生きる力を引き出す看護」を目の当たりにした思いでした。

最期まで、父を患者としてではなく、一人の人間として接してくれました。訪問看護師さんたち。父も幸せな気持ちで旅立てたと、心から感謝しています。

願いごと



〈静岡県〉山本 潤 40歳

看護師さんは、泣かないものだと思っていた。毎日、たくさんの命のそばにいるから、人の生死に慣れています。

夏の気配がする7月、胆石の摘出手術をするために入院することになった。

当時の私は仕事の多忙さに追われ、正直、手術のことよりも、山積みの仕事に一刻も早く取り掛かりたい気持ちでいっぱいだつた。個室での入院を希望したが、病棟の個室は空きがなかつたため、無理を言つて違う病棟の個室を手配してもらうことにして。手術後は痛みもあったものの、すぐに仕事に取り掛かる日々が続いた。

夜勤の巡回に来られた看護師さんは皆、私を心配してくれたが、

正直それどころではなかつたのだ。やがて、仕事が一段落したある日の午後、看護師さんの一人が、「フロアで『七夕の会』をやるので来ませんか?」と、誘つてくれた。

そうか、きょうは七夕なのか。

なぜか分からぬが、うなづいてしまつた。

後悔しながらも出向いたフロアと呼ばれる場所には、初めて見る同じ病棟の患者さんがたくさんいた。点滴がつながつていて、ベッドごと移動して参加している人までいたのには驚いた。

「それでは、皆さん各自で願いごとを書きましょう」

看護師さんの言葉に、配られた紙にそれぞれ願いごとを書く。ふと横を見ると看護師さんがササ

不思議に思つて、その願いごとに目を向けた。

「もう少しで、妻に会えるのがうれしい」

震える文字で書かれたその願いごとを、私はいつまでも見ていた。



入選

医学的にはどうすることもできない
「病」であっても、スタッフの笑顔が患者さんや
そのご家族にとって大きな心の支えになることは
あると思います。「ちょっとした励ましの言葉や笑顔」の
力は計り知れないものがあり、
そのことを伝えたくて応募しました。
医学は日進月歩、情報通信技術の発達など、
恵まれた時代になってきています。しかし、患者さんや
家族の方々を励まし、支え、ともに病と闘う、
そんな医療現場にはいつの時代でも「笑顔」が
不可欠だと思います。大変な業務の中ですが、
どれだけ看護師さんの笑顔に救われた者がいるか、
そのことを世に伝えることで、看護師さん自身が
看護業務を誇りに感じてもらえばと、
そんな想いを込めた応援メッセージを贈ります。
〈和歌山県／男性／一般〉

毎年、受賞作品を楽しみに読んでいます。一般部門として応募できる最後の
機会なので応募しました。春からは看護師として、数えきれないほどの看護
のエピソードをこれから経験できると思うと期待と不安でいっぱいです。
今度は看護職部門に応募できるようになることを楽しみにしています。
〈埼玉県／女性／一般〉

長年、家庭と仕事を両立して
きた後ろ姿を見て育った孫娘が、将来同じ方向を目指すと決めたようで、とてもう
れしいです。孫娘にできる唯一のプレゼントになると
思い、応募しました。
〈福岡県／女性／看護職〉

ご応募いただいた方々から たくさんのコメントが寄せられました！

医療は大変なお仕事なので、
このように少しでもそれを伝える
試みは、ぜひ続けて
いただきたいと思います。
〈東京都／女性／一般〉

このたびは、すてきな企画を
ありがとうございます。
職業人としての締めくくりの時期を
迎え、自分が歩んできた道を何かの
形に残しておきたいと思っていた
ときに、この企画をインターネット
で知り、とてもうれしく思いました。
〈岡山県／女性／看護職〉

応募を通じて精神看護での学びは、
職場だけでなく生活中でも自分
自身の糧となる大切なものと
あらためて気付くことができました。
今回このエピソードを通して精神
看護や精神科勤務の素晴らしさが
1人でも多くの方に伝わると
うれしく思います。
〈福岡県／男性／看護職〉

病院で「忘れられない看護エピソード」の
ポスターを見るたびに、今日も一日がんばろうという
気持ちになります。私は看護師として未熟で、
臨床経験は少ないけれど、自分にも忘れられない
患者さんとの思い出がたくさんあって、
そこからたくさんのこと学ばせてもらいました。
ことしの春からは、がん看護専門看護師の資格を取
得するため大学院に進学するので、いったん、臨床を
離れることになります。患者さんとの思い出を忘れずに
大学院での勉強をがんばりたいと思い、
今回応募させていただきました。
〈石川県／女性／看護職〉

一般部門 最優秀賞 〈静かな勇気〉を映像化

「看護の日・看護週間」事業の一環として看護職、
一般の方々から看護にまつわるエピソードを募集する
「忘れられない看護エピソード」。
6回目を迎えた今回は、初めて映像化も試みました。
映像化した作品は、一般部門で最優秀賞に選ばれた〈静かな勇気〉。
「生」と「死」の不思議なつながりを、
温かみあふれるタッチで描いた
感動のストーリーを、ぜひ映像でもご覧ください。



映像化作品はこちらからご覧になります。
<http://www.nurse.or.jp/portal/list01.html>

右記QRコードからも
アクセスできます





5月12日は
看護の日

www.nurse.or.jp

【主催】厚生労働省／日本看護協会

【後援】文部科学省／日本医師会／日本歯科医師会／日本薬剤師会／全国社会福祉協議会

【協賛】日本病院会／全日本病院協会／日本医療法人協会／日本精神科病院協会／全国自治体病院協議会
日本助産師会／日本精神科看護協会／日本訪問看護財団

テルモ(株)／東洋羽毛工業(株)／ナガイレーベン(株)／パラマウントベッドホールディングス(株)／
(株)ソシエ・ワールド／ワタキューセイモア(株)